児童一人ひとりの興味・関心を生かした社会科学習

1　はじめに

「マルチメディア」「インターネット」といった言葉が花盛りの現在，我が国の高度情報化社会への進展にはめざましいものがある。子どもたちの身の回りにも，さまざまな情報がさまざまなメディアをとおして提供されている。情報は生活に身近であるというよりも，情報なしには快適な生活できないといった方が適切かもしれない。このような産業構造の変化をうけ，今回の指導要領の改訂で，「運輸・通信」の単元が新設された。

「テレビっ子」という言葉が示しているように，子どもたちにとって，テレビは最も手ごろな情報源である。しかし，新聞も同じように身近な存在であることには変わりない。記事をスクラップしている児童もいる。そのような状況のなかで，これまでの「情報産業[1)]」の実践は，子どもの興味・関心にそった展開が十分になされていたであろうか。新聞なら新聞を，テレビならテレビをというように，児童の興味・関心を外に置き，１本のレールの上を走らせる実践が多かったのではないか。本稿では，以上ような問題意識のもと，新聞社とテレビ局の見学を児童が選択する，学習内容の複線化を取り入れた実践について考察していく。

2　研究仮説と分析視点

(1)　研究仮説

> 児童一人ひとりの興味・関心を大切にし，新聞社・放送局の見学を選択できる学習を取り入れるならば，児童はめあてをもち，意欲的に活動するであろう。また，互いの調査結果を共有できるような場を設けるならば，質の高い社会認識を形成することができるであろう。

(2)　分析視点

【視点１】

> 見学場面で，新聞社・放送局を選択できる場を採り入れたことは，めあてをもって意欲的に追究していくうえで有効であったか。

【視点２】

> 調査結果を共有する場を設けたことは，質の高い社会認識を保証するうえで有効であったか。

3　実践事例　第５学年「情報を伝える産業」

(1)　単元について

本単元は，新聞社や放送局で働く人々は，読者，視聴者のニーズに応じて，情報をより速く，より正確に伝えるため，さまざまな工夫や努力をしていることや，これらの情報がわたしたちの生活にとって欠かすことのできないものであることを理解させることが中心である。また，マスコミからの情報は一方通行的な側面があることや，広告の役割に気づき，必要な情報を適切に活用することができるようにする能力を身につけさせることも大切である。

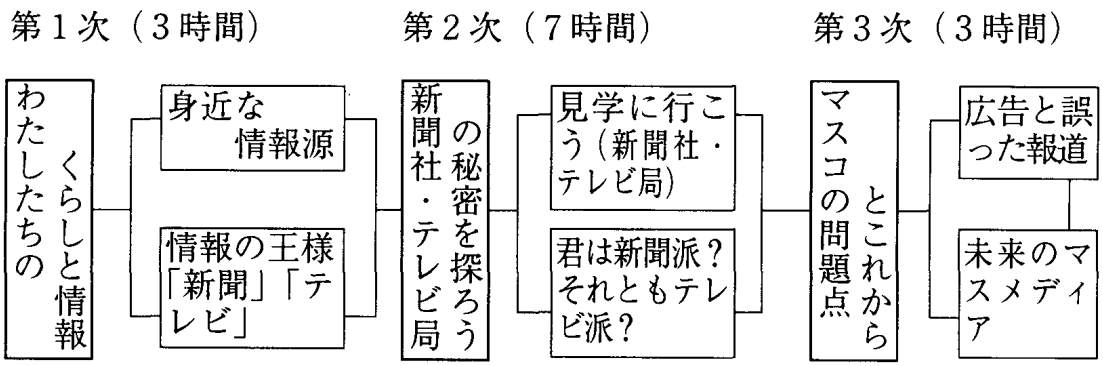
事前の調査結果から，児童は主にテレビからさまざまな情報を得ていることが明らかになった。そこで，学習展開にあたっては，新聞の実物をじっくり観察することで，新聞の記録性，一覧性，詳報性などにも着目させ，新聞にも興味・関心をもたせることをねらうようにする。また，新聞，テレビの共通点・相違点を明らかにさせることで，児童一人ひとりが，個々の興味・関心にもとづいためあて意識を大切にできるようにしたい。さらに，調査活動の結果を共有する場を設けることで，「情報を伝える産業」についての質の高い知識が獲得できるようにしたい。

(2)　単元の目標

○　新聞社や放送局は，読者，視聴者のニーズに応じて，情報をより速く，より正確に伝えるために，最新の技術を導入するなど，さまざまな工夫や努力をしていることが理解できるようにする。

○　マスコミを通じて供給される情報には，虚報・誤報があることに気づき，情報の価値を自分なりに判断したり，未来のマスメディアを想像したりすることができるようにする。

(3)　指導計画……全13時間扱い



(4)　授業実践の概要

第１次では，自分たちの身の回りのさまざまな情報は，さまざまなメディアをとおしてもたらされていることに気づかせることをねらった。「情報を何から得ているか？」の問いに対する児童の反応は以下のとおりである。

テレビ，新聞，ラジオ，チラシ広告，パンフレット，雑誌，電話，パソコン通信（インターネット），電光掲示板，手旗，回覧板，手紙，ポスター，ファックス，標識，電報，会話

児童はさまざまなメディアから情報を獲得している。しかし，展開にあたっては，内容を絞り込む必要がある[2)]。そこで，対象を「ニュース」に絞り込み，新聞社とテレビ局に視点をあてることにした。具体的な活動としては，新聞記事の仲間分けやニュース番組の調査から，多種多様な情報がもたらされていることを確認した。これらの活動から，今日の情報の王様は新聞とテレビであることを捉えさせるようにした。

第２次は，新聞社とテレビ局に分かれて実際に見学を行い，情報産業の仕組みや人々の働きをおさえる場面である。第２次の詳細は，次項「授業実践の分析と考察」で詳しく述べる。

第３次は，マスコミの問題点とその将来について考え合う場とした。１週間の新聞紙上の広告の割合を調べることで，紙面の約５割を占める新聞広告の役割とその問題点を話し合った。また，沖縄サンゴ落書き事件や松本サリン事件での虚報や誤報の事実から，マスコミの負の部分にも目を向けさせるようにした。学習のまとめでは，児童の自由な発想を生かし，「未来の新聞」「未来のテレビ」をイラストに表す活動を取り入れた。

4　授業実践の分析と考察

(1)　【視点１】の分析結果と考察

【視点１】

見学場面で，新聞社・放送局を選択できる場を取り入れたことは，めあてをもって意欲的に追究していくうえで有効であったか。

①　実践における【視点１】の分析結果

実際に見学に出かける際，「調べたい」「行ってみないと」というように児童の内発的なやる気をもたせる支援が大切である。そこで，午前０時10分に発生した電気店火災の記事が，同日の朝刊に載っていた事例を紹介したり，ＮＨＫニュースでの生中継放送を視聴させたりした。このような活動から，

次のような共通のめあてをもつことができた。

情報を速く伝えるための新聞社，テレビ局の秘密を探ろう。

また，「何を観てくるか」，一人ひとりが明確な視点をもつことも重要である。有意義で効率的な調査活動とするためには，計画の段階で数多くだされた疑問点を整理し焦点化しておく必要がある。児童から出た疑問と単元の目標とを照らし合わせて，見学の視点は次の３点とした。この中から，各自自分で調べたい視点を選び，中心的に見てくることにした。

1）どのような設備や機械があるのか。
2）どのように新聞や番組を作っているのか。
3）働いている人の様子はどうか。

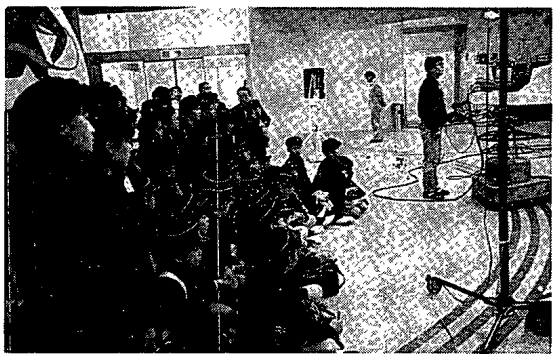
では，児童はどのような理由から見学場所を選択したのであろうか。〔見学場所を決めた理由〕のアンケート集計結果は以下のとおりである。

〔１．見学場所を決めた理由は？〕

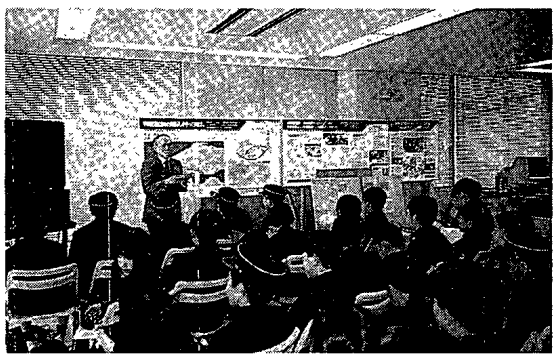
・興味があり，行ってみたかった	49名（68.1%）
・友達が行くので	7名（9.7%）
・一方は行ったことがあるので	2名（2.8%）
・その他	14名（19.4%）

「興味があり，行ってみたかった」と答えた児童が約７割を占めた。「その他」のなかには，「ＮＨＫは普段いつでも行けるから」と答えたものが８名であった。結果的には，ほぼ同数の児童が，各自の希望どおり，新聞社，テレビ局に分かれて出かけることとなった。

当日，児童は各自工夫したメモを片手に見学を行った。〔見学中のやる気度〕のアンケート集計結果は次ページのとおりである。



「しーっ！」本番中（ＮＨＫ広島放送局にて）



「たくさん聴くぞ！」（中国新聞社にて）

〔2．見学中のやる気はどうでしたか？〕
・とてもあった……16名(22.2%)　・あった……44名(61.1%)
・あまりなかった……10名(13.9%)　・なかった……2名(2.8%)

「とてもあった」「あった」の合計が，83.3%と高い値になっている。

では，見学場所の選択制そのものについて，児童はどう受けとったのであろうか。〔選択制見学の実施の賛否〕に関するアンケート集計結果は以下のとおりである。

〔3．今後の見学も選べるのがいいですか？〕
・ぜひ，やってみたい……29名（40.3%）
・できればやってみたい……24名（33.3%）
・あまりやりたくない……15名（20.8%）
・やりたくない……4名（5.6%）

「ぜひ，やってみたい」「できればやってみたい」の肯定派は73.6%と高率である。その主な理由は次のとおりである。

・興味ある所，行きたい所を選ぶことができる……19名（40.5%）
・情報交換することで，両方の様子がよく分かる……13名（35.8%）
・人数が少なくなり，よくみたりきいたりできる……9名（17.0%）

「できればやりたくない」「やりたくない」の否定派の中にも，「片方だけではなく，両方行きたかった」と積極的な理由を述べた者が9名いた。

② 【視点1】の考察

①の分析結果から，次の2点が指摘できる。

1点目は，「行ってみたい」「興味がある」という児童は，個々の「こだわり」を大切にすることができた，ということである。社会科における感性は，その入り口として，このような児童一人ひとりの個性的な社会事象に対する興味・関心，言い換えるならば，「こだわり」によって育まれるのではないであろうか。

2点目は，選択場面を取り入れることで，内発的な意欲をもたせることができた，ということである。児童は活動場面を好む傾向があるが，多くの児童が「やる気があった」「また，このような見学をやってみたい」と回答していることに裏付けられている。

以上の考察から，見学場面で，新聞社，放送局を選択できる場を取り入れたことは，めあてをもって意欲的に追究していくうえで有効であった，と考える。

(2)　【視点２】の分析と考察

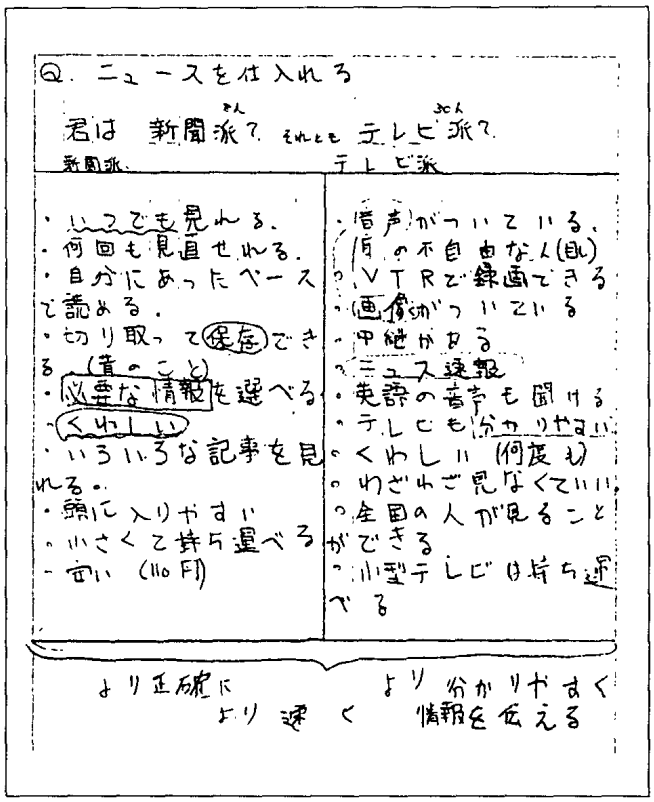
【視点２】

調査結果を共有する場を設けたことは，質の高い社会認識を保証するうえで有効であったか。

①　実践における【視点２】の分析

社会科の教科としての目標を鑑みるとき，そこで育成されるべき感性は，児童一人ひとりが個性的かつ，科学的な社会認識を形成することと深く結びついていなければならない。より質の高い社会認識を獲得させることは，その子なりの確固とした「社会を見る目」を育てることを保証するからである。本実践においては，見学後、それぞれの見学の視点をもとに，調査結果を共有する場を設けた。お互いの調査結果を発表し合った後，次のような問いを投げかけた。ここでは新聞とテレビの優劣をつけることがねらいではなく，情報産業に関する質の高い社会認識を育てることがねらいである。

君は，新聞派，
　それともテレビ派？



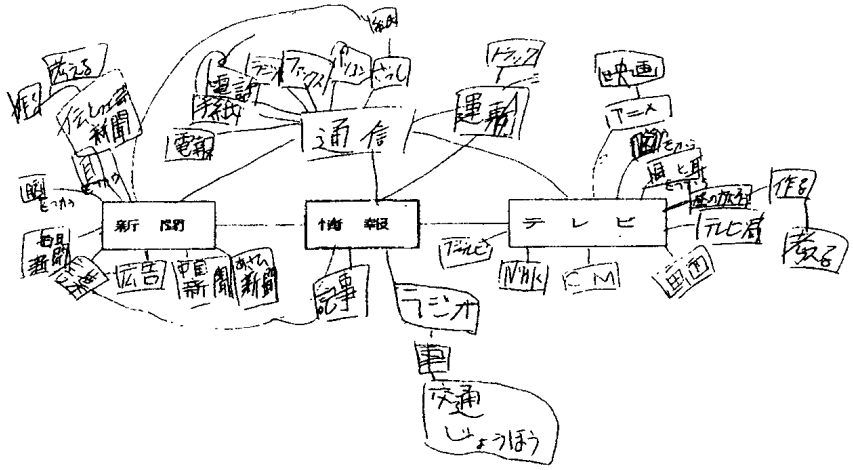
この学習をとおして，新聞派，テレビ派に分かれて，それぞれの長所を出し合った。児童はそれぞれ，見学で得た情報やその後の個人調べで得た情報をもとに，白熱した話し合いを展開させた。話し合いが一段落したところで，教師から「共通点はどうか」と問いかけた。そうすることで児童は，

（情報を伝える産業で働く人たちは）より正確に，より速く，より分かりやすく情報を伝えている。

という，質の高い知識を抽出することができた。そのことは，次ページに示す授業実施前後のイメージマップの変容からも捉えることができよう。この

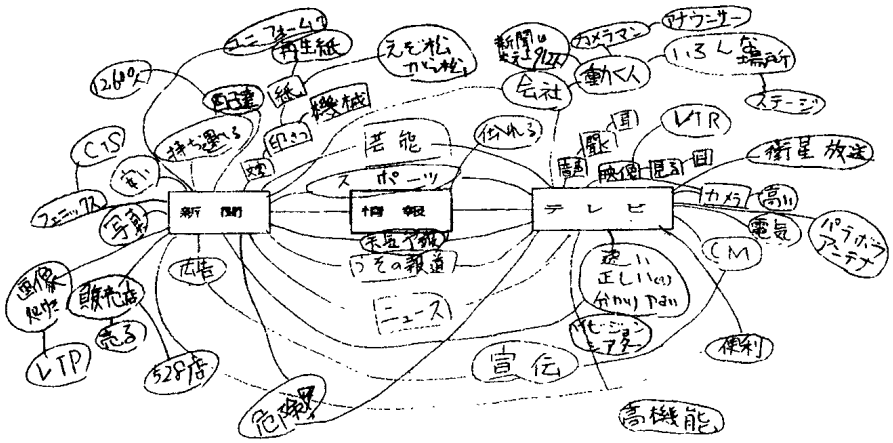
児童は，学習をとおして「芸能」「スポーツ」から，「うその報道」「宣伝」にいたるまで，多くの新聞とテレビの共通点を捉えていることが分かる。

イメージマップⅠ（授業実施前）



※□の言葉から連想する言葉をどんどんつなげていこう。
※ときどき，□の言葉にもどって，つながっているか確かめてみよう。

イメージマップⅡ（授業実施後）



② 【視点２】の考察

情報産業を学習する際，新聞社を取り上げた場合は新聞社の，テレビ局を取り上げた場合にはテレビ局の知識が獲得される。本実践のように，両者の見学で得た情報を共有する場面を設けることは，それぞれの学習の相違点のみではなく，共通点を見つけさせることがポイントである。そうすることで，「情報を伝える産業」についてのより質の高い，より説明力のある社会認識を育てることが可能となる。このことは，「君は，新聞派，それともテレビ派」において抽出されたレベルの高い知識やイメージマップの変容の様子から読み取ることができよう。

以上のことから，本実践において調査結果を共有する場を設けたことは，質の高い社会認識を保証するうえで有効であったと考える。

5　おわりに

以前，第３学年「わたしたちの広島市の様子」の学習で，交通，土地利用，地形といった視点から，児童を３コースに分かれさせた複線型の見学を実施したことがある。しかし，見学コースの設定は，指導者が一方的に与えたもので，決して児童の「こだわり」を生かしたものではなかった。そのような反省が本実践の遠因にある。

今後は，どのような単元でどのような選択場面を設定すべきかといった，教材開発が大きな課題である。また，児童の問いの深まりが自己評価できるような学習展開の工夫についても取り組んでいきたい。

〈参考文献および注〉

1) ここでは，「我が国の放送，新聞，電信電話などの産業」を「情報産業」として取り上げている。その根拠は，岩田一彦，産業構造の変化と教材化，朝倉隆太郎他編，「現代社会科教育実践講座№６」，現代社会科教育実践講座刊行会，1991，pp.72-78. に詳しい。

2) 北俊夫，子どもの多様な願いに応える社会科の授業づくり，文部省小学校課・幼稚園課編，「初等教育資料 № 641.」，東洋館出版，1995,pp.52-63.に，新聞社，テレビ局，ＮＴＴの３箇所の見学を選択制にした実践が紹介されている。しかし，あまりに広く学習対象を広げることは，学習が焦点化されにくくなる恐れがあると捉えた。そこで，「ニュース」を視点をあて，新聞社，テレビ局の２つから選択させるようにした。

（佐藤　健）